

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和4年度 宮城県意見交換会（第1回）議事概要

令和4年8月4日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】 令和4年8月4日（木）10:00～12:00

【場 所】 復興庁宮城復興局 1階会議室（石巻）／オンライン

【出席者】

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社七十七銀行／国立大学法人 東北大学／宮城県／一般社団法人みやぎ連携復興センター

＜今年度の意見交換会テーマに関連する団体（主団体）＞

仙台港周辺地域賑わい創出コンソーシアム

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 宮城復興局

＜事務局＞

株式会社 J T B

【議事概要】

1 開会

復興庁より、東日本大震災の発生から11年が経つ中で、「新しい東北」の取組として、第2期復興・創生期間の地域の取組をしっかりと支えていきたいと考えており、本年度も引き続きご協力をいただきたい旨、挨拶した。

2 各団体の活動紹介

各参加団体より、取組紹介資料（資料2-1～資料5）をもとに取組を紹介した。

3 令和4年度のテーマ、取組内容等について

事務局より、資料1をもとに今年度の取組テーマ、取組内容案等を説明した。また、仙台港周辺地域賑わい創出コンソーシアムより、参考資料1をもとに当団体の活動内容について説明した。

4 意見交換

（1）令和4年度のテーマ、取組内容案について

令和4年度のテーマを「持続可能な地域文化の継承と磨き上げ」とし、エクスカージョンプログラムを検討していくという方向性について合意が得られた。意見交換においては、震災遺構や語り部をプログラムに加えることを検討する際には、実際に震災により被害に遭った方々に対して十分配慮する必要があるといった意見や、外から来た人たちが「見る」・「話を聞く」のみとなるのではなく、地域活動に参加することで一緒に地域文化をつなぐような取組となればよいといった意見が得られた。

（主な意見）

・地域文化の継承と磨き上げの中に震災の遺構や語り部を加えていくという話は、大きな部分では必

要だと感じている。これからの伝承の取組を進めていく中で、宮城県として一番懸念しているのは風化。10年が経過し、伝え続けていくことの難しさを感じている。そういう意味で「観光」とからめていくことの必要性は十分に認識しているが、一方で実際に被害に遭った方々に対する配慮はまだ必要である。宮城県としても、伝承団体と意見交換を重ねながら、どういう方向がいいのか考えていきたいと思っている。宮城県としては、取組内容として紹介したように震災伝承みやぎコンソーシアムを設立して、各団体との意見交換の場にしたいと考えている。

- 昨年と連続性のある取組が実現できればと思う。地域文化をしっかりと磨き上げ、継承も進めていくことには、東北大学もお手伝いしたいと思っている。いろいろな地域が同じように自分の地域を盛り上げていこうと言っている中で、震災を経験した我々の地域が発信すべき特色は、伝承のところだと思う。今SDGsが叫ばれている中で、各企業も社会課題を解決していくことが存在意義だと言っている。その部分にもまさに合致する。震災を経験した東北地域がしっかりとそれを伝承することは社会課題の解決である。
- 国連が推進しているSDGsと並ぶ世界の3大アジェンダの1つに「仙台防災枠組 2015-2030」がある。日本では知名度が低いが、災害によって亡くなる人や経済被害を2030年までにどこまで減らしていけるかというものだ。仙台で定められ、仙台を名前に入れた世界のアジェンダの1つである「仙台防災枠組 2015-2030」をしっかりと推進していくことは、我々に課された社会課題である。南海トラフなどの巨大地震、津波被害が東南海地域で起きたとき、同じような犠牲者を出さないようにするためにも、我々は教育の観点で発信をしていかなければいけない立場にあると考えている。是非こうしたところをしっかりと位置づけて実現したい。そうした取組の1つとして、東北大学では「防災に関するISO」を策定している。次年度以降の活動の中で、「伝承のツーリズム」というものに企画の1つとして取り組んでいきたいと、経済産業省にもアプローチをしているところだ。世界的にはダークツーリズムと呼ばれている分野に近いものだが、例えばアウシュビッツの歴史などを、観光資源という言い方をすると心情的になるところもあるが、「伝えていかなければいけない事実」として位置づけ、後世の人々にきちんと伝えていくことを実現したいと考えている。
- 今日の資料にもあったように、しっかりした継続的な取組ということで、KPIなどを設定した上で取組をしていくことも重要である。
- モデルケースになり得るところとしては、広島がいいのではないかと。原爆の事実をどう世界に発信していくかということに関して、広島の行政、町の皆さん、企業さんが、世界遺産の登録も戦術の1つであるが、修学旅行の誘致やインバウンドの拡大などを政策的に行っている。こうしたところをモデルケース、ベンチマークとしながら東北地域でいろいろな施策を展開し、被災4県が「世界の人々が訪れるべき場所」として位置づけられるような姿を目指していけたらいいのではないと思う。観光資源にするということに対してはやはり抵抗感があるという話もあるが、何らかの形で配慮しながらも、実際にはやっていかなければいけない部分だと考える。心情に訴えるのが望ましくなければサイエンスベースで、科学にフォーカスして伝えていくやり方もある。津波はどのような形で発生するのか、どれだけ威力があるものなのか、時間軸の中でどのような避難行動をしなければいけないのか、どれぐらいのことが求められるのかをしっかりと伝えていくなどだ。石巻では門脇小学校も展示が開始され、記念館もできている。そうした施設がサステナブルな形できちんと回っていくような仕組みを作り、永続的に伝承を実現できる場にしていくことが必要だと思っている。ただ、実際に修学旅行の訪問先として考えたとき、3ケタの人を収容できる伝承施設はなく、全て規模が小さいという問題がある。修学旅行で訪れようとしても、小グループでいくつか行き先を分散してくださいとお願いしなくてはいけないのが現状となっている。そういった受け入れ態勢を地元で考えていくことも必要だろう。そこはプロデュースしていかなければいけない部分であると思う。
- 教育という観点では、東北大学では震災に関する出前授業をやっている。全国の小学校高学年ぐらいを対象として、要請があれば出向いて行って授業をする。こういうことも活用していく場があ

ばと思っている。また、出前授業は社会人向けも可能である。同じコンテンツを使いながら、伝え方は対象に合わせて配慮できる。

- ・「持続可能な地域文化の継承」ということで、復興に関して今までの地域をさらに磨き上げて、再度情報発信をしていくというイメージはつくのだが、一方で「震災とどう絡んでいくのか」がすごく難しいかなと思った。昨年の教育旅行というテーマは比較的関わりやすいテーマだったが、「観光」と「震災」のどこに重点を置くかは慎重に検討しなければいけない部分もあると思う。ただ、震災がマイナスだと思ってしまうことは違うと思う。上手く取り上げていければと思う。石巻周辺だと「わらアート」という事業があり、仙台港周辺・仙台東あたりですたれていた農業を、学生さんたちを入れてもう一度を盛り上げていこう、地域住民にそうした取組を広げていこうというもので、地域のさつまいもを使って商品開発をしている。さらに余った藁を使って「わらアート」として地域の方々に情報発信をしているという実例がある。今後の担い手として、そういった団体につながることはできる。
- ・震災から10年を過ぎると、その当時を話す方々が段々いなくなる。広島の場合は次の世代の語り部が生まれ始めていると聞いたことがある。今後は東日本でもそういったことが必要になっていくのかなと思う。直接被災しているわけではないが、事実は事実として伝えた上で、その地域の変化や自分なりの考えを話せる、次の世代の語り部が出てくると、より観光に近づくというのか、観光ベースでも話せるのかなと思う。
- ・確かに観光を中心にするのはいいことだと思う。ただ、普通は観光というどうしても「見る」とか「話を聞く」というだけだ。震災で壊された建物はお金をかければ直せるが、自然景観はなかなか元に戻すのが難しい中で、例えば石巻の復興祈念公園では、最終的には10万本植樹をするという目標で、今でも教育的に植樹したりイベントをして植えたりしている。そのように観光と組み合わせ、例えば来訪した人たちに参加してもらいながら地域文化を作っていくようなことができれば、もう少し違ったものになるのかなという気がする。震災を伝承している団体や地域の賑わいづくりをしている様々な団体とからめて、外から来た人たちが、ただ観光というよりは、一緒に復興するということができればと思う。復興というお手伝いするというイメージだが、植栽する、地域のイベントに参加するなど、もう少し楽しいイメージだ。今年の夏は昔やっていた夏祭りが3年ぶりに復活するが、そういうことをからめて人を呼びこみ、活かしていくことが、地域文化をつなぐということにつながると思う。これが被災沿岸部をつなぐような取組のきっかけになればいいと考えている。
- ・テーマについては、今後の動きにフィットしているので良いと思う。個別具体的な話になるが、例えば仙台港・仙台東部沿岸部付近では、貞山運河を土台として地域文化を世に広めていこうとする団体ができ。貞山運河は伊達政宗が築き上げてきた土木遺産だが、それをベースとしてブランディングしていくという形だ。テーマは事務局案として、実利に結び付けていきながら、永続的に対応していくことが重要になると考える。
- ・「震災」と「観光」をどうマッチングしていくかは非常に微妙な問題を含んでいることは事実だ。「観光」という言葉を使うのではなく、「エクスカージョンプログラム」がいいのではないかと思っている。日本語に訳すと体験型の見学会である。コロナ禍前、仙台では数多くの国際会議、学会、ビジネス研修会が開催されていた。そこに1～2泊で来る方のために、必ずハーフデイやワンデイのエクスカージョンプログラムがいくつか用意されていて、課題や興味に合わせて参加していた。北にある多賀城から仙台市の東部沿岸エリア、名取市、亘理町、山元町あたりまでは、被災をしている一方で復興が進み、魅力的なコンテンツのある施設がいくつもできている。ただ非常に交通の便が悪く、つなぐものがない。点として良い施設はあるものの、面として捉えられていない。仙台港の振興を考える上で、東部沿岸地域の北から南を1つの面と捉えて人を呼び込んでいくことは、仙台にとって1つ課題なのではないかと思う。学会などのエクスカージョンプログラム

として震災遺構や語り部の方々とからんでいくことは、非常に良いのではないかと思います。そうしたプログラムが磨き上げられていって、徐々に一般のツーリズムに乗っていく形になるのが1つのステップかなと考えている。提案として、まずエクスカージョンプログラムのような形を磨き上げていくことが、今年の課題にマッチするのではないかと考えている。

- ・中長期的なターゲットとしては、2025年の大阪万博の際のエクスカージョンプログラムとして、西から一気に東北に持ってこられるような魅力的なものが作り上げていけるとよいのではと思う。

(2) 参画団体について

主団体より、対象地域に位置する施設関連の方々や、自治体等との連携が想定される旨の意見があり、具体的な参画団体に関しては、第2回意見交換会において具体的な取組案を説明する中で再度検討することとした。

(主な意見)

- ・基本的には多賀城市から名取や閑上、亘理、山元町までの間にある施設関連の方々や、自治体との連携を想定している。また、JTBコミュニケーションデザインは地域活性化に非常に知見をお持ちであり、過去にいろいろなアドバイスをいただいているため、参画していただくと助かる。
- ・どういう形を想定しているかわからないので、今の時点で参画団体を紹介するのは難しい。具体的に「こういうところはないか」と相談していただいた方が良い。

(3) 今後のスケジュールについて

事務局より示したスケジュール案について特段の意見は示されず、参加団体の合意が得られた。

5 閉会

テーマ・取組案、主団体等について合意が得られたため、第2回意見交換会に向け、事務局と主団体において今回議論で挙げられた論点についても配慮しながら、取組内容の検討を進めることとした。具体的な参画団体に関しては、第2回意見交換会において具体的な取組案を説明し、再度検討することとした。

第2回意見交換会は10月を目途に開催することとし、具体的な日程については、改めて事務局より連絡することとした。

以上